

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

**<証言> 戦後社会党史・総評史 構造改革論再考 :
加藤宣幸氏に聞く(下)**

著者	五十嵐 仁
出版者	法政大学大原社会問題研究所
雑誌名	大原社会問題研究所雑誌
巻	652
ページ	63-74
発行年	2013-02-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/8188

構造改革論再考

——加藤宣幸氏に聞く（下）



構造改革についての補足

—— 構造改革に関する同志の盟約や勉強会の会場が、船橋成幸さんの回顧によりますと銀座の銀龍というところでも開催されていたととれる記述のあるところもあります。このお店について、もしご記憶がありましたらお話しいただきたい。それから、研究会の頻度、つまり年に何回ぐらい開催されていたのか。

それから、今日はお名前が出てきていませんが、東海大学名誉教授で、河上丈太郎委員長の息子さんの河上民雄先生と構造改革とのかかわりについて、どのようなかかわりがあったのかということをお話していただきたいと思います。

構造改革を提起されたのは1950年代終わごろだというと、加藤さんは30代前半ということになります。当時の党には重鎮、長老が多数おられたわけで、今の普通の日本人の感覚からすると、30代前半の者が党を大きく変えようとするようなことを提案すると、必ずお叱りとか反発とかやっかみとかあったりすると思います。そのような動きが党の中にあったのかどうかということをお話してください。

それから、今日のお話だと社会党組織の構造なのかなという気がしますが、何の構造を、どのように、だれが改革しようとしたのか。この

ことはいろいろな文献を読んでもよくわかりません。これは松下圭一先生のまとめにあるとおり、よくわからないほうがいいのかもかもしれませんが、主語とか、だれが、何を、どのようにというようなところで、もう少し具体的なお話があるとありがたいと思います。

社会党は50年代、構造改革を提起されたところが国会議員の数としてはいちばん多い時代だったと思います。構造改革を唱えることによって社会党の国会議員の数が増えて、結果的に社会党政権が誕生することも目指したのか。それとは関係なく構造改革を唱えられたのか。議席増との関連について教えてください。

最後に、構造改革という問題が当時の社会党にとってどういう問題を持っていたのかということ、その後の党の低迷から見て、構造改革が採用されなかったことが原因なのか。社会党のその後にとって、構造改革論の持った意味について教えていただきたいと思います。以上です。

加藤 最初のご質問について、船橋さんのいう銀龍という店は銀座の裏にあった普通の大衆的な中華ソバ屋です。私が懇意にしていた人の行きつけの店で、2階に和室が一つあっただけで、ここで勉強会をやった覚えはありませんし、

本稿は「社会党・総評史研究会」の第2回研究会の記録の続きである。加藤宣幸氏の報告については、本誌No. 650（2012年12月号）に掲載されている。

そもそも勉強会をやるような場所ではありません。グループで飲みに行ったのを船橋さんが間違えたのだと思います。

河上民雄先生と私はここ何年かずっと懇意にしていますが、私が河上委員長時代の書記として本部で働いていたころ民雄先生は委員長の秘書でスピーチライターをされていて、私が本部を辞めたあと国会議員になり、国際局長としても活躍されました。右派の理論をまとめる立場から統一社会党の綱領をつくられましたが、私が書記時代には、河上民雄さんのお顔はもちろん知っていましたが、河上派の書記局のグループを代表して構造改革派と接触したり、一緒に作業するなどということはありませんでした。

党では30代前半だからといって重鎮、長老から叱られることはありませんでした。ただ、戦後の社会党は、戦争中10年間の活動の空白がある、昭和11年、12年の人民戦線事件で日本無産党の場合一斉に検挙され、結社も禁止される、社会大衆党も軍部に協力して大政翼賛会で解党するなど、社会運動、労働運動が10年間そこで断絶しているのです。そのために、戦前から活動してきた方たちと戦後入った者との間にちょうど10年間の空白があるので、感覚的にも若干のギャップを感じるがあったように思います。

戦争中に、左翼による組織的な抵抗運動はなかったように私は思います。いろいろな説がありますが、少なくとも私が接触している範囲で、日本無産党系の人たちが集まって情報交換は多少していたようですが、組織的な抵抗運動という形ではなかったと思います。共産党の方は獄中に入っていたし、外にいて運動があったかという、なかったと私は思っています。

戦後の社会党で、戦前からの指導者たち幹部は、党内のことを見ている暇もなく、選挙活動の応援など演説に全国を走り回っていました。

こういう党本部の活動について、先ほど院内、院外と申しましたが、議員は院内活動や自分の選挙区を回ることに忙しくて、選挙の票にならない党務というか、党の仕事には関与などしてられない。関与するのは、選挙区の心配がない少数の議員か書記長とか組織局長など限られた幹部だけです。

ただ、組織改革の時は、戦前の無産政党時代からずっと組織部長、書記長を歴任して、組織論については一家言のあった浅沼稻次郎書記長から我々が提案すること自体を叱るということではなく、その内容について長い経験から意見を述べられた。例えば社会党青年部の場合、党内にあると反幹部闘争になりやすいので、我々が党組織の外郭に社会主義青年同盟をつくり、外で大衆的な青年運動をもっとやるべきではないかという提案をしたのに対し、浅沼書記長は、戦前からの経験で、青年部は中に置くとやかましいが、外へ出せば若い者はみんな共産党へ行ってしまうから、中に置いておくという理論でした。

党組織のありかたについて、共産党にはご存じのようにピアトニツキーの組織論など代表的なボリシェビキの党組織論がありますが、社会民主党の場合には決定的な組織論がないというか、ドイツ社会民主党、オーストリア社会党、イギリス労働党など、それぞれの国によって組織形態は違うから、共産党の組織論のように統一したものはない。たとえば、イギリスの場合、院内労働党と院外労働党は別の党みたいな形のものさえありました。

社会党の場合、戦前から基幹組織は連合体で、Federation Unionという県連合会で、共産党は民主集中制の組織という対比になります。この機構改革の時にも、社会民主主義政党らしくというか、やはり連合体ながら議会主義を目指す党の院外組織と議員団との組織関連をどうする

かなどについて独自の組織論を探りました。ただ、戦前の無産政党はご存じのとおり、社会大衆党が大躍進した時でも国会議員は37人。その前の選挙では22人。その前は7人という経験しかない。無産政党といえば院外活動が主で、議会活動はほとんどなかった時代の組織形態が戦後の社会党の組織の原型であったわけです。

しかし、議論されたのは共産党のような中央集権的なものではないが、連合会ではなく地方本部制というものになった。つまり、思想的に組織論が統一されていない。県連合体が集まって社会党本部が形成されるのですが、そういうことが理論的にも整理されなかった。それに対して、長老からということではなく、経験豊富な浅沼書記長がいろいろと意見を述べたのです。

長老というよりも、すべての議員から反発を受けたのは、大会決定で国会議員であれば自動的に代議員になれたのを廃止するという大改革をやって、基本組織から選ばなければ代議員になれなくしたことです。これは、何回かやってからまた元に戻りましたがある意味では議会主義政党のあり方として当然だと思います。

オーストリア社会党の信託者党员制度というようなことを、私は原案の段階でいろいろ提案しましたが、これについては長老というよりも左派、右派が一致して、とくに社会主義協会の向坂逸郎先生からは、こういうものは革命的な党としてやるべきではない、浅沼書記長からは経験にないと、左右両方から反撃され頓挫してしまいました。

社会党は、ご存じのように5万人の党员で1,000万近い票が集まりました。私は組織部にいて、従来は党员を増やすといえば、例えば大学の先生が社会党に入党しても地域支部に入っ

て一般党员と同じようにビラを貼ったり会合に出たりすることが求められるが、知識や経験を

生かす協力をすればよいので、なんとか一律ではない形をとれないかと、党活動をもう少し近代的・組織的にやれないかと考えていたのです。

今の民主党では、サポーターということで、投票権だけある党员と議決権もある党员と二重になっているようですが、こういうものの一種の始まりですね。オーストリア社会党はこういう制度を持っているからと提案したのです。

社会党の構造改革は一つの政治的スローガンだったという面もあったのではないかと思います。社会党の中の組織を改革するという意味とは全然違います。社会党の構造改革について、私どもと一緒にやっていた貴島正道氏が現代の理論社から出した『構造改革派—その過去と未来』(1979)という本が、私たちのことを正確に書いています。社会党の構造改革派は何を目指し、何をやろうとしたか。構造改革とは、社会党の方針書に盛り込んだ政治路線を総称したものです。松下先生などは自治体改革を構造改革路線とも言われました。そのように多様な政治路線を総称したものだと思います。何年間ぐらいで改革できるか。道筋を言っているのですから、何年でできるというようなものではありません。

社会民主主義と構造改革とのかかわりについて、ご質問の趣旨がよくわかりませんが、いずれにしても戦後長い間、社会主義革命論、権力の移行過程論、議会主義か議会外闘争重視とかいろいろな論争がありました。まず、暴力革命か平和革命かということでは、共産党も昭和23、24年頃でしたか、9月革命、10月革命、あるいは山村工作隊とか、敵の出方によっての闘い方があるなどの論争がありました。それは平和革命で行くとなった。ただ、平和革命でも院内外の闘争をどう結びつけるか。また、社会主義協会の場合には、政権を取ったら渡さず

にストライキしてでも闘うなど、院外闘争を重視するというように、党内外でいろいろ論議されてきたのです。

しかし、そういう議論だけしていても、職場や農村の現場では通用しない。実際にいろいろ成果を上げる改良を積み上げないと駄目ではないか。社会主義政権ができればよくなるから、それまで我慢しろというスタイルでは通用しない。社会党は綱領論争を繰り返す中で、これでは現実の社会を改革する説得力がないということから、政治姿勢を変えなくてはということになったと思います。

社会党の議員は増えましたが、どうしても3分の1の壁が破れない。自民党と比べ2分の1の政党と言われましたが、これには政策だけでなく組織的にも原因があったのです。社会党の左派は官公労の組織に乗かって急速に伸びたのですが、中選挙区制では3人のうち1人は、ほとんど社会党が取れる。それを超えて2人取ろうとすれば、政策もそうですが、組織的に2人立てる力を持たないと議員は増えません。ただ、労働組合出身の議員は、国会議員になるとこれ以上、もう1人仲間を増やして苦勞するより1人で安定したいので、2人目を立てようとしなから3分の2が破れない。政策的にも、もう少し広い支持を受けようとするれば、従来のスタイルではだめで、もっと国民にわかりやすいものにしないと新しい政治路線が提唱されたと思います。

書記の公募，トリアッチ

—— 今日のお話を受けて、4点ほど質問させていただきます。1点目は、加藤さんが機関紙局におられた時に職員を公募したというお話がありました。社会党の書記で公募したというのはたぶんその時ぐらいしかなかったと思いますが、社会党の書記というのは基本的にどうい

う経路で採用されていたのか。ちゃんと公募して試験をやるというのではなかったと思います。

2点目は、今日加藤さんから構造改革論についてうかがって、いままではトリアッチの理論から構造改革論になったというイメージが私自身、強かったのですが、おそらく加藤さんが意図されていたのは、社会党の路線に当時の最新の理論である松下圭一先生とか、そういうものを採り入れることによってさらに時代に合ったものに、社会党を新しいものにしていくということだったのではないかと。だから、あまりトリアッチの影響はなかったと思います。政党の路線をその時代、時代に合わせて新しいものにしていくのは党として当たり前で、構造改革論というのはその当たり前のことだったと、私は今日お話をうかがってそういう印象を抱きましたが、そのとらえ方で正しいのかどうか。

3点目は、江田三郎さんと鈴木茂三郎さんの関係です。大原社研の雑誌に載った鈴木徹三先生の論文（1995年8月、441号、10頁）だと、構造改革論が出てきた時に鈴木茂三郎さんは、これは社会党が昔から言っていたことなんだというふうに理解されていたのが、だんだん構造改革論反対になっていく。新聞記者から江田さんについて聞かれると、鈴木派の嫡流は佐々木更三君で、江田君というのは外からもらってきた子供みたいなものだ（『東京新聞』1961年12月3日付朝刊）と冷たく言うぐらいにまで悪化してしまうわけです。1960年の終わりが61年ごろ、江田さんと鈴木さんの間に何か確執があったように見えますが、加藤さんから見てそういうものがあったのかどうか。

4点目は、ドイツ社民党を学んだ方から、ベルンシュタインをしっかりと評価しなさいとかいろいろ言われたという話がありました。戦後のドイツ社民党の路線とか、戦後のドイツの社会

民主主義について日本で広く理解されるようになったのは、たぶん70年代ぐらいになってブランド政権ができた時からだと思います。60年代ぐらいまでは、もちろんバート・ゴデスベルク綱領が採択されたというニュースは日本にも入ったと思いますが、ドイツ社民主義の理解のレベルというのはあまり高くなかったと思いますが、構造改革論争が出てきた時のドイツ社民主義、特に戦後ドイツ社会民主主義というのは日本ではどれぐらい理解されていたのか。この4点についてうかがいます。

加藤 機関紙局で公募を始めたのは、松下先生などが主張されたのですが、本部の公募はずっと後で、私がいたころはまだ公募はなかったと思います。主として多いのは、国会議員の選挙運動に参加して、その議員の推薦でなるとか、社会主義協会の場合は特に、向坂先生が九大の学生の中から推薦する。秘書に推薦したり、書記局に大内兵衛先生が直接推薦したりというような形です。戦前はほとんど縁故採用でしょうか。公募になったのは機関紙局が初めてです。

トリアッチのことにについては今、言われたとおりです。トリアッチをかついだというより、ユーロコミュニズムなどマルクス主義理論自体が流動化してきた。社会党結党のころはマルクス主義とは言わなかった。鈴木茂三郎氏や稲村順三氏など労農派と言われる人たちも、マルクス主義でなく科学的社会主義と言っていました。左派社会党になって労農派綱領ができてからマルクス主義と言い出した。私も左派社会党職員でしたが、書記局員はほとんど『レーニン全集』などを給料天引きで買っていました。左派社会党とはそういう時代で、それは私が辞めてからですが、マルクス主義はもちろん、そのうち社会主義協会はマルクス・レーニン主義の正統派だと公然と言ったり、文章で出るようになりました。

江田さんと鈴木さんについてですが、これは理論的な問題だけではなく、派閥内で江田さんと鈴木さんの反りが合わなかったのだと思います。左派社会党の中は鈴木派と、和田博雄派、野溝勝派、松本治一郎派とに分かれ、書記局では和田派と鈴木派の対立が激しかったのです。私たち3人は鈴木派に属していましたが、和田派との激しい対立には距離を置いて参加しませんでした。

これが構造改革派をつくっていく前の状態で、鈴木派の客分だというような言い方をしていました。労農党から来た人たちもだいたいそんなことで、統一を主導したのは鈴木派ですから、労農党の人もみんないちおう鈴木派に属していましたが、和田派との対立があまりにも激しいので、彼らもちょっと距離を置いていました。

戦後のドイツ社会民主党については、『レーニン全集』を書記局の多くの人が買うという左派社会党の雰囲気ですから、とても評価するところではないし、ほとんど勉強してない。私は個人的に明大の西尾孝明先生の本を読んだり、お話を聞いたりした程度です。ドイツ社会民主党からは、私が辞めた後ぐらいからエーベルト財団のようなところを通して党に招待があったようですが、私がいたころは頭からこれは改良主義だ、社民だというようなことで組織としての関わりはありませんでした。

私の場合、構造改革に至る直接的な政治路線に関しては佐藤昇、松下圭一先生にいろいろ教わりましたが、その前には多くの先生方から社会主義について教えるを受けてきました。ドイツ社会民主党やオーストリア社会党については敗戦直後、当時社会党におられた猪木正道先生からお話を伺ったのが印象に残っています。

—— イギリスの労働党についてはどうですか。

加藤 戦後早く、河上民雄先生が労働党について翻訳を出されていて読んでおりますが、政党としての労働党の政治活動や組織活動を研究するというよりも河合栄治郎先生以来ずっと教えられてきたフェビアン主義など英国の社会主義思想史を学ぶということだったように思います。

—— 社会党がお手本として学ぶようなものとは考えられていなかった？

加藤 ないですね、学ばなかったです。

—— トリアッチとの関係で、グラムシについてはどうですか。

加藤 僕は直接あまり勉強しなかったんですが。グラムシも、もちろん思想として勉強会をやったりしていました。

—— その当時、グラムシの理論よりもトリアッチの評価のほうが高かったのですか。

加藤 具体的な政治路線という意味では、トリアッチのほうですか。合同出版社あたりからイタリア共産党の本とか、トリアッチのものがずいぶんたくさん出て、やがてグラムシの場合、思想という意味で出てきたように思います。

作家の萩原延壽さんという方がいらっしゃいましたが、あの方のお世話で私は1964年に江田書記長と一緒に、ちょっとだけ英国労働党に行ったことがあります。当時、江田さんは日本に労働党幹部のペバンが来たりして英国労働党に親近感を持っていて社会主義インターを通じての連携や議会活動の範として考えたりしたようですが、党として組織問題を労働党に学ぼうとはしませんでした。ご存知のように、イギリス労働党の場合、院外組織と院内議員団とは別の組織のようになっていますが、ある意味で社会党も、党と労働組合の関係としてこういう形を論じてよかったのではないかと思っていました。

—— イギリス労働党の組織のあり方みたい

なものを意識されていた？

加藤 勉強すべきであると考えていました。しかし、それは戦前型社会党の組織論になじまず左派からも右派からも全然取り上げてもらえず、議論の対象から外されてしまいました。

社会党青年部、構造的諸改良

—— 今のお話の中で、3人の方は鈴木派に属されていたということですが、矢野さんはいづから江田さんの秘書になられたのですか。

加藤 書記長になった時です。ところが、なった途端に国会議員を落ちてしまった。矢野君と私は工業学校から高等工業とずっと一緒に、社会党にもともに入党した仲間です。しかし、彼はもともとあまり政治的なタイプの人ではないのですが、私が江田三郎からだれか秘書を探してくれと人選を任せられ、私の推薦で秘書になったのです。

その前提として矢野君が政治家江田三郎の政治姿勢や人柄を理解し支持したから実現したのです。彼はその時、ビジネスをやっていて、秘書になれば給与は半減し、しかもその給与は政治資金を集めた後から支払われるという条件だったのですが、頑張ってくれました。戦後、私の父親（勘十）が芦田均内閣の労働大臣をやった時も、彼はその当時青年部にいたのですが、青年部としては芦田内閣に反対なので、だれも行く者はいなかったのに矢野君は友達の親父が探しているならと秘書になったという、政治的というより友情に厚いタイプの人なのです。

—— 今日の構造改革に入る前に、青年部の時代、1949年総選挙での社会党の大敗北を青年部はどのように受け止めて、どんな再建方策をとられたのか、そのへんをうかがいたいと思います。

加藤 戦後の青年部というのは、独自に青年部の執行委員会を持って、党内党みたいに片山

内閣反対とか、連立反対とか、4党協定破棄とか、そんなことをガタガタやっていました。結党の時の中央執行委員会は20人のうち15人が右派で、左派は5人でした。書記局は青年部の2人だけが左派系でした。

青年部が4党協定破棄だ、連立反対だ、単独内閣だと騒いでいた時に、左派系の議員は五月会という議員団をつくっていたのですが、その五月会の方針と青年部の方針がほとんど同じでした。今から客観的に見れば、青年部は五月会の手兵みたいなものです。その五月会の事務局長は松本健二というれっきとした共産党員でした。ですから共産党政治路線の影響が左派議員団にあり、さらにその影響下に青年部があった。今から見ると共産党の政治方針にほとんどリンクしていたことは否定できません。その後、松本氏は労農党の事務局長になって、そこでも共産党路線と労農党主体性派と激しい論争し、やがて共産党本部に戻るのですが、なぜか除名される。当時の青年部はそんなふうでしたが、49年の大敗北については、左右分裂した時でしたかね。

—— いや、連立政権が失敗した後。

加藤 そうですね。これは単純で、連立したからだ。単独政権で行けばいい。連立したから負けたのだというわけです。

—— 左派路線のほうが正しかったんだという主張ですか。

加藤 そうです。その後、左右分裂した後は、左派は組合の上に乗っかってどんどん伸びて右派を追い越していきますから、単独政権論ですね。

—— トリアッチ路線との関係というところで、直接的にトリアッチ路線を目指したものはなかったけれど、トリアッチの構造的諸改良という表現を、構造改革というふうに造語したというお話でした。表現を変えてトリアッチ路

線を導入したというふうにも読めますが、そこらへんはどういうふうに解釈すればいいのか。

もう1点、上田耕一郎氏がかかわっていたという話もきいたことがあります。春日庄次郎グループとは連絡とかやりとりとか、まったく没交渉だったのか。そのへんをうかがいたいと思います。

加藤 佐藤昇氏などは春日庄次郎・安東仁兵衛氏などのグループにいたわけですから、春日グループと社会党の我々と両方にコミットしていて、共産党を自然離党したのか、除名されたのかわかりませんが、春日グループは社会党へ入る人と入らない人に分かれていったのではないかと思います。

僕も春日氏と1回ぐらいお会いしたことはありますが、社会党に入党するか、独自で行くか激しい議論があったのだと思います。ですが、私たちと研究会を共同で持つなど組織的な関係はありませんでした。理論的な指導者である佐藤昇氏は春日グループにもどういう関係かはあったと思います。

上田耕一郎氏の関わりというのは、研究会に出席されていたことと、そこで報告をされたということだけです。

トリアッチの影響について、我々はトリアッチの影響を受けていますが、トリアッチがこう言ったからとか、トリアッチの文章によればこうだからとか、よくマルクス主義の場合はそういうのがありますが、そのような形で我々がトリアッチを採り入れたということではないのです。

—— 構造的諸改良という概念を積極的に使ったと。

加藤 そうです。情勢がこう変わっているのだから対応すべきなのだという点などです。

戦後、社会党本部青年部というのは党学校とかいう形で党員教育を組織的に受けていないの

で、戦後早くは大橋静市氏や宇治守正氏に習い、その後、松下さんや佐藤さんのお宅など、多くの学者を訪ねて勉強しました。ちょっとだけですが、猪木正道先生や丸山真男先生の家にも行ったことがあります。

ただ、敗戦直後は日本共産党の影響が強くて、党の方針に反するためか、トロツキーとかローザ・ルクセンブルクとか、そういう関係の本は左翼系の出版社から出されなかった。そういうのが出るのはずっと後だったので、それらを勉強できなかったということはありません。

—— 社会党の中では、系統的な党員教育みたいなものはなかったのですか。

加藤 ないです。ただ社会主義協会が、後に労働大学という学校をやっていました。労働大学は党の機関ではないから、党学校ではなく社会主義協会の学校です。

私などは、たまたま戦後、理論的なことを教えていただいた方が、どちらかというと3.15の共産党で検挙された後、満鉄や協和会へ行ったりしたというような講座派系の先生に教えられる機会が多く、協会派、労農派の方に教わることが少なかった。もちろん政治的には鈴木茂三郎さんとか伊藤好道さんとか、数多く労農派の方と接触していました。

江田ビジョン、社青同

—— 江田ビジョンが出される前の会合のところで、江田氏は竹中さんという人から言われたことを即座に賛成して翌日、発表したという形で、練り上げたものではなかったと受け止めていいんですか。

加藤 そうです。それ自体は竹中さんの発言そのものです。

—— 現場にいらっしゃる3人の反対を抑えて、よし、発表するぞと言って発表して。そういう形で出たのが、世にもはやされた。

加藤 そうです。

—— 江田さんは一種のショック療法を考えたのではないですか。

加藤 そうです。彼はあっさりしていて、ポストなんかすぐ辞めてしまって、恋々としません。それがいいところでもあり、政治的には欠点でもあるのですが、人間的には魅力的でした。

—— それをたたき台にいろいろ議論をやられて。

加藤 それでやられたら仕方がないって、あっさりしたものです。江田ビジョンというのは理論的に練り上げたとかそういうものではないのです。竹中さんともときどきお会いしますが、本人は自分の口からは絶対に、おれが書いたとか言ったんだとか、自分は言わないという主義です。でも、僕は現場にいたので、竹中さんは僕が発表するのは黙って、否定はしないということです。

—— 社会主義青年同盟に対して、具体的な関係や援助したという事柄がもしあれば、教えていただきたい。『月刊社会党』の1964年4月号を見るかぎり、少なくとも初期の社会主義青年同盟は構造改革派が中心だった。社会党の青年部、あるいは社会主義青年同盟の中で構造改革派の影響力は大きかったのではないか。実際の、青年党員あるいは社会主義青年同盟員の中での影響力の程度はどうだったのか。そのあたりについて教えていただけたらと思います。

加藤 僕はそれについて、あまり詳しくないので、それこそ機会があったら初岡昌一郎さんとかを呼ばれたらと思います。彼は構造改革派の、社青同の幹部で、やがて社会主義協会との選挙で負けて辞めていきます。たしかに社青同ができる当初は、構造改革派の路線を支持する勢力が強かったと思います。それがやがて社会主義協会に負けていくということですが、そう

いう社青同の中の状態について、僕は詳しくないのでお答えできません。

—— 40年代後半に社青同をつくろうという動きが1度ありましたよね。ところが、それが立ち消えになって、60年安保の前あたりから、またつくろうではないかという議論が出てきた。60年安保闘争の中で民青が増え、それへの対抗もあって社青同をつくったという経緯ではないかと僕は思っています。その中で、いま言われたような、中での勢力関係の変化があったとすれば、安保を前後する運動の中で青年部の中で協会派の力が強まっていった、社青同の中のイニシアティブも変化したということではないかと思いますが、どうなのですか。

加藤 戦後直後にも社会主義学生同盟というのが、社会党系で、中央大学とか東大とかで結構あったんです。それがそのまま何となく消えたわけです。それから後、組織・機構改革で社会主義青年同盟をつくるという方針になって、その間、先ほどお話ししたように、浅沼さんが外につくらないほうがいいという考えを持っておられたから、そういうこともあって外にできなくて、機構改革の後、できたということです。その中で内部抗争がいろいろあったらしいんですが、僕は参加していないのです。

—— 社会主義青年同盟をつくらない。その代わり今度は右派が独立青年同盟をつくるんです。いわゆる独青です。それが第1次分裂のきっかけになる。

加藤 ところが今になって、独立青年同盟というのを当時右派の人たちに聞いているんですが、だれも実態をよく知らない。かかわったという人がいないのです。国鉄労組の中に室伏さんという反共の論客で活動家でしたが、その人が佐野学、鍋山貞親氏の指導を受けてつくったとされていますが、ほとんど実態はなかったのではないかと思います。

—— その幻に結局……。右往左往で荒れてしまうわけですね。

加藤 そうです。これは証拠があるわけではないのですが、日本共産党は佐野・鍋山とか、脱党者を徹底的にたたきますから。労農記者クラブの山崎早市さんとか共産党のフラクションが佐野・鍋山との関連で組織実態はほとんどないけれど独青というものをバツとやり、社会党青年部もそれに乗ってワッと行くというようなことだったのではないのでしょうか。

—— 独青の問題でいちばん過敏に反応したのが、私の印象だと細谷松太さんのグループで、独青なんていうものができてけしからん、あれは黒いブントだとか何とかと。細谷さんのグループも実態を知っていたというより、共産党側のイメージづくりをそのまま受け取ってしまったというだけでしょうか。

加藤 そうだと思います。ほとんど実態はない。だけど、あれだけ大騒ぎになった。私は共産党の方針だと思います。青年部の中にも共産党員だった人もいるので、直接指示を受けたか受けないかは別ですが、政治的な軌跡としてはほとんどリンクしていました。

—— 社青同ができた時に構革派が強かったというのは、党の方針だから、そうだと思いますが、向坂グループというか、協会の影響力が三池と安保に負けて全然だめになったのに、むしろ反構革で息を吹き返してしまったみたいところがある。政策転換闘争というのは構革派が主導でというふうに考えてよろしいですか。

加藤 考え方は同じですが、構革派が主導してつくったというものでもないと思います。だけど、発想は同じです。位置づけようと思えば、あれも構革論だというふうに位置づけられます。

—— 今の加藤さんのお話だと、よく世間で言われている理解とは順序としては逆だと。現

場組合、現場の大衆活動家、労働組合の中から、苦い経験を経て生まれてきた政策転換闘争の考え方みたいなものがあって、外から眺めていると、それがいかにも構造改革派の考え方とフィットしているから、これは構造改革派の政策を具体化したものだと思われやすいけれども、順序としては逆だったと。

加藤 僕はそう思います。構造改革派がやれと言ってやったわけではない。政策転換という闘争はたしかにそうです。実際はそういうものが構造改革的な闘いだと位置づけられるということだったと思います。

—— もう1点お聞きします。1957、58年から60年ぐらいまでは稀有な時期で、共産党の若手と社会党の若手の部分、当時の加藤さんぐらいまでの年齢のところに溝というか、組織は違うけれど、考え方として交流があった。佐藤昇さんなどを通じて非常にあったという意味では、稀有な時代だったと思います。

その後、その当時の交流、例えば上田さんなどが報告していたというその時代の交流は、もちろん表立ってはなくなってしまったにしても、人的なつながりみたいなものは後の時代まで若干続いた部分はあるんでしょうか。

加藤 私もそうですが、私ども3人は戦後ずっと、共産党と社会党で違うけれど統一戦線というか、強い弱いはありますが、考えとして共産党排除というのはない。それから構造改革の反独占・統一戦線、統一戦線の中には共産党が当然入るという発想でした。ただ、社会党の政策として承認される執行委員会では、我々が書いた原案には共産党も含むということでしたが、それは削られたというのが事実です。発想としては共産党排除ではなくて統一していくという反独占・統一戦線という思想をずっと持っていました。だから、ああいう共同の研究会にもなったわけです。

ただ、その後は「統一社会主義同盟」（統社同）の人たちはみんな、共産党の中でたたかれていくわけです。そうなってくると共産党との間も、その人たちは悪くなるし、私たちも社会党は統社同というか、その人たちとの交流は組織的ではないけれど個人的にはありますから、社会党構革派は反党分子からいろいろ知恵を借りているということで共産党から一緒にたたかれる。社会党側の人も上田さんの人柄にはみんな敬意を表していたけれど、交流することなどはできなくなったと思います。私たちもなくなりました。

成田三原則

—— 先ほどの政策転換闘争のあたりに絡む話ですが、構造改革派が社会党の中で60年代以降、再び少数派になっていくことに関して、三池以降、現場の労働者、労働組合が総評系の労働組合の職場闘争に入っていく。そういう職場闘争路線に対して構造改革派は下から職場闘争を盛り上げるというか、そういう現場の雰囲気をつかみきれなかったという分析があります。これに関してはどうでしょうか。

加藤 僕は労働運動内部のことはよくわかりませんが、労働組合の、特に民同の幹部の人たちはみんな構造改革派と自称していて、職場闘争を闘わないためにも構造改革路線なんだというようなことを言われる場合もあるのではないかと思います。どういうふうに言っているかわかりませんが。

社会党というのはご存じのように、労働組合の上に乗っかっているというよりも、労組の機関決定の上に乗っかっていたわけです。その労働組合の機関が本当の組合員、大衆と密着していたか、本当に支持を受けていたかとなると、実態的に見てもあやしい。機関決定で政党支持が決められてくるわけですが、その機関決定な

るものが本当に労働組合の意向を代表していたかとなると、乖離していた点があったのではないかと私は思います。だから、職場の活動と組合機関の人たちの考え方とがずれていることが多かったのではないか。ずれたまま、その機関の上に乗っかって社会党がいたというふうに思います。

成田知巳論文の三原則とよく言われますが、あれは私が書いたのですが、組織原則を書いたわけではなく、社会党の欠陥はこういうところにあると指摘しただけです。それがいつの間にか、成田三原則とかになってしまったのです。欠陥を克服するにはどうするかということは書いてないというか、書けなかったんです。致命的な弱さは労働組合の機関決定の上に乗っかっていることだと思っていました。

—— 成田三原則も加藤さんが書かれたんですか。

加藤 そうです。あれは私が書いたのです。

—— それは重要なことですね。構造改革という言葉に訳し変えたのも加藤さんですか。

加藤 あれは私がネーミングしました。

—— 社会党内において革命イメージというようなものがあったと思います。革命とはどういうものか。権力の一挙的奪取のような考え方に対して、構造的改革、構造的改良というのは、改良・改革を順次進めることによって権力構造の変質を図るようなイメージがあったのではないのでしょうか。構造改革がいいというのは、今までの革命のイメージなりやり方なりを変えようと。皆さんの中に、イメージ転換をしようという意識があったわけですね。

加藤 そうです。

—— それが社会党の中で受け入れられなかったのは、一挙的奪取のような形でやろうと。そこはオーソドックスな従来の路線が残ったということですね。

加藤 社会主義協会を中心に巻き返され、従来のとおりということになりました。

—— その後に「社会主義的・的政権」というのが出てきます。あれは改良なり改革を積み重ねて権力を手にしていくということですか。

加藤 それは、私にはよくわからないのです。

—— 社会主義的・的政権というのは佐々木更三さんが言っていたことですね。

加藤 ええ、佐々木更三さんが言い出した。

—— ただ、構造改革論も革命のイメージを変えたと言われますが、江田さんの本を読むと、構造改革論というのはいままで社会党がやってきたことをちゃんと理論化してやっただけで、これはべつに変えてないんだよということを強調しているというイメージがあります。結局、構造改革も江田ビジョンも受け入れられなかったんですよ。

加藤 まあ、そうですね。いったんは受け入れられたけれど、その後、否定されて。

—— その時に受け入れられていたら、その後の社会党はどう変わったか、あるいはどういう可能性が生まれていたと思われますか。理論的に言えば、この時に新しい路線が提起されていたわけです。結局、党内抗争などもあって構造改革も江田ビジョンもつぶされてしまいます。

加藤 国民的な支持は、江田という政治家のキャラクターもあるから、受け入れられやすくなって票が増えたんじゃないかと思いますが、わからないですね。

労働運動との関連

—— 労働運動との関係についてももう少しお聞きします。私の理解ですと、三池闘争の時に協会側がかなり力をつけて職場闘争をわりあい重視する。あと、太田さんたちも似たような見

方をして、構革論とか江田ビジョンの時に批判するわけです。やはり構革論が次の安保後の何か、社会党のあり方だというような、支持するような組織は総評の中に存在したと考えられますか。

加藤 特につくられたということではないと思います。総評はあそこ、いわゆる社会党党員協議会とかあるけれども、ほとんど組合の人事派閥みたいなことになってしまっていて、路線を議論する組織ではなかったのではないかと思います。

—— ただ、本来ならば清水慎三さんは構革に近かったはずなのですが、太田薫さんと一緒に「七つの疑問」とかやり始めて、行きがかり上、反構革になって、「不幸な出発」とか書いてしまうんです。だから、まさに総評っぽい話ですが。

加藤 構造改革論を同盟や全労や何かに特にアプローチしたとか連携したということはないんです。総評で清水さんなどは批判されたけれども、これはわからない。後でここにもちょっと触れましたが、青年部、社青同のOBグループなどは清水さんを非常に信頼していたわけです。我々も知らない関係ではなかったんですが、清水さんに相談しないで、むしろ佐藤昇氏とか松下氏にいろいろ相談した。

彼は総評の長期政策委員会の主査で、総評の理論的顧問をやっておられましたから、我々が

清水さんのところに先に相談していれば、そういう行き違いも起きなかったかもしれない。それで彼は「不幸な出発」と表現したけれど、自分のところに相談に来なかったということもあったと思います。左社綱領のとき、青年部OB、社青同OBの連中に、社会主義協会の案とは別に「清水私案」というのを出されました。我々も協会の案より、「清水私案」の方が近いと感じたのですが、ニュアンスは少し違うところがあった。清水さんに構造改革の問題をフランクに相談に行って、松下さんや佐藤さんと一緒に相談に乗ってもらっていれば、「不幸な出発」でなかったのかもしれないと思います。

—— 仲井富さんも、清水さんより佐藤昇のほうがいいということで、皆さんがそっちへ行った。

加藤 清水さんはそういう意味でちょっと離れたから。たしかにそういう人的なことがあったかとも思います。

—— 清水さんは構革派三羽鳥の大將のつもりだったが、61年だかに向坂逸郎とソ連に行っている間に彼らは離れてしまったみたいなおことを言っています。

加藤 清水さんは当然、我々が教えを受けに来る関係だったのに、松下のようなよくわからない若いやつのところに行って、俺のところに来なかったということがあったかもしれません。(完)